

Karunāpundarīka の梵蔵漢資料¹

武蔵野大学 仏教文化研究所 研究員

武蔵野大学 薬学部 講師

石上 和敬

0. はじめに

本稿は、大乘經典Karunāpundarīka（以下、＜悲華經＞²と表記）の梵蔵漢資料に関わる諸情報を収集・整理したものである。

1968年に山田一止はロンドンからKarunāpundarīka梵本の校訂テキスト（Yamada[1968b]、または、KP）を、研究編（Yamada[1968a]）とともに出版した。同校訂テキストは、それ以前にカルカッタから出版されたDās刊本（Dās[1898]）に比べて、参照し得たサンスクリット語写本の数においても、また、チベット語訳・漢訳をも対校するなどその校訂の精度においても、格段に優れた校訂テキストであった。山田はテキストの校訂に際して、サンスクリット語写本6本、チベット語訳の2版本、そして、二種類の漢訳を参照している。現在、諸学者の依拠する＜悲華經＞梵本としては、このYamada[1968b]が標準テキストとなっている。

また、公刊には到っていないが、Yamada[1968b]と前後して、アメリカにおいて二人の学者が＜悲華經＞梵本の部分的な校訂テキストを作成した。その一人は1956年に＜悲華經＞の第1章と第2章

の校訂テキストと英訳を、ペンシルヴァニア大学への学位請求論文（未公刊）として提出したR.W.Weilerであり、彼は、Yamada[1968b]と重複する写本も含めて6本のサンスクリット語写本を参照しつつ校訂を行なっている。いま一人は、R.W.Weilerを引き継ぐ形で1969年にく悲華経の第5章と第6章の校訂テキストと英訳を、やはりペンシルヴァニア大学への学位請求論文（未公刊）として提出したS.Terakawaであるが、彼は7本のサンスクリット写本を参照しながら校訂を行なっている。R.W.WeilerとS.Terakawaは序論においてチベット語訳と漢訳への簡単な言及を行なっているが、校訂に際してはチベット語訳・漢訳との対校は記されていない。

以上、これまでのく悲華経梵本の校訂テキストについて、それらが参照した梵蔵漢の諸資料に関する情報にも触れながら概観したが、これらの校訂テキスト出版からおよそ40年以上の歳月が流れた今日、参照し得るく悲華経のサンスクリット語写本、及びチベット語訳・漢訳の諸資料は大いにその数を増した。たとえば、サンスクリット語写本だけでも18本程度の所在が確認され、チベット語訳においても参照できる版本、写本が十数本に及び、また、漢訳についても「大正新脩大蔵經」以外の諸本についても利用がしやすくなっている。く悲華経を取り巻くこのような研究環境の変化に鑑み、現時点で所在が確認され、また、実際に参照し得るく悲華経関連の梵蔵漢諸資料の収集・整理は、今後のく悲華経研究のために不可欠の作業となっている³。

このような事情から、本稿は、現時点で所在が確認されるく悲華経関連の梵蔵漢諸資料に関する情報を収集・整理しようとするものである。ただ、本稿は、著録した梵蔵漢資料の全体を内容的にも精査した上での公表ではない点、また、本稿で紹介した資料の中には筆者未見の資料も一部含まれている点、ご理解を賜りたい。収

集した資料の内容的な検討、及び、未入手資料の収集は、今後の課題となる。

1. <悲華經>の諸異本

1.1. サンスクリット本

1.1.1. 写本

<悲華經>のサンスクリット語写本については、断片的な写本も含めて、現時点で18種類の写本の所在情報を確認しており、そのうち、15種類の写本については複写を取り寄せるなどして内容を確認している。以下に、18種類の写本の基本的な情報を列挙する。

<サンスクリット語写本一覧の見方>

- 1 行目：所蔵場所等。(未見)の表示は、筆者による内容確認はできていないが、先行研究、カタログ等によってその所在が確認されている写本。
- 2 行目：カタログ番号とその典拠となるカタログ
- 3 行目：料紙の材質、葉番号、一葉あたりの行数（行数が一定していない写本もあるが、その場合には、大半の葉の行数）
- 4 行目：サイズ（主にカタログ等からの情報）
- 5 行目：写本奥書に示された書写年代¹。奥書に記載がない場合、「なし」と表示。及び、書写に関する情報。
- 6 行目以下：特記事項。特に当該写本への言及が見られる先行研究等。

なお、各情報末尾の*（アステリスク）は、その情報がカタログ等に基づく情報であることを示す。

[ネパール]

(1) National Archives, Kathmandu

No. A108/5 (NGMCPの番号)。また、No. 5/101 (National Archivesの整理番号)

紙、葉番号 1b-192b (但し、第33葉が2葉あるため、全体で193葉)、6行。

サイズ：34.5 × 8.0 cm*。

日付：Samvat 897 (= 1777 A.D.)。書写地sankhu。

特記：本写本については、Nepal-German Manuscript Cataloguing Project (以下、NGMCP)のマイクロフィルムを利用した。成松芳子 [1976: 199]；石上和敬[1993: 29-30]

(2) National Archives, Kathmandu

No. A108/8 (NGMCPの番号)。また、No. 3/590 (National Archivesの整理番号)

紙、葉番号 1b-151b、11行。

サイズ：32.0 × 15.5 cm*。

日付：Samvat 958 (= 1837 A.D.)

特記：本写本についてもNGMCPのマイクロフィルムを利用した。
成松芳子[1976: 199]；石上和敬[1993: 29-30]

(3) ネパール 私蔵本

No. E1/3 (NGMCPの番号)

紙、葉番号 1b-61b; 63a-239b, 6行。(第62葉を欠く。また、最終葉である第239葉は、前葉までとは明らかに書体が異なる)

サイズ：39.0 × 9.5 cm*。

日付：Samvat 981 (= 1861 A.D.)

特記：本写本もNGMCPのマイクロフィルムを利用した。なお、本写本については、ニューヨークのThe Institute for Advanced Studies of World Religions（略称：IASWR、世界宗教高等研究所）においてもマイクロフィルム化されている。（Film-Strip No. MBB-1971-101-110）。石上和敬[1993: 29]さらに、本写本は、Takaoka[1981: 4]にあるNo. A 61とも同一写本である。高岡カタログ所載の写本については、東京大学インド哲学仏教学研究室所蔵の「ネパール仏教仏典写本マイクロフィルム（Microfilms of the Buddhist manuscript）」を利用した。

(4) ネパール 私蔵本

No. E324/16 (NGMCPの番号)

紙、葉番号 15a-37b; 51a-125b（但し、末尾数葉では葉番号に混乱あり）、7行。

サイズ：42.0 × 8.5 cm*。

日付：部分的な写本であるため、確認できず。

特記：本写本は完全な写本ではなく、(KP,44,2-119,17; 160,12-411, 8)に相当する部分のみである。本写本についてもNGMCPのマイクロフィルムを利用した。

(5) ネパール 私蔵本

No. E2072/5 (NGMCPの番号)

紙、葉番号 1b-106b（但し、第86葉が2葉あるため、全体で107葉）、8-10行。

サイズ：38.0 × 8.7 cm*。

日付：Samvat 814 (= 1694 A.D.)

特記：本写本についてもNGMCPのマイクロフィルムを利用した。

(6) ネパール 私蔵本

No. H327/16 (NGMCPの番号)

紙、葉番号 17a-24b、7 行。

サイズ：33.8 × 9.0 cm*。

日付：部分的な写本であるため、確認できず。

特記：本写本は完全な写本ではなく、(KP,40,5-61,17)に相当する、
全体から見ればごく一部の写本である。本写本についても
NGMCPのマイクロフィルムを利用した。

[イギリス]

(7) Royal Asiatic Society, London

No. 21, Hodgson Collection. (Cowell & Eggeling[1876: 18])

紙、葉番号 1b-125b; 128a-204a (第126,127葉を欠く)、6 行。

サイズ：35.9 × 9.7 cm*。(14 × 3-3/4 inches*)

日付：Samvat 916 (= 1796 A.D.)。書写者 Amṛtānanda。

特記：Yamada[1968a: 8] ; Weiler[1956: xxxii] ; Terakawa[1969: liii]。

(8) University Library of Cambridge, Cambridge

No. Add. 1367. (Bendall[1883: 73])

紙、葉番号 1b-94b、12-14 行。

サイズ：36.8 × 15.2 cm*。(14-1/2 × 6 inches*)

日付：なし

特記：Yamada[1968a: 8] ; Weiler[1956: xxxi] ; Terakawa[1969: liii]

(9) University Library of Cambridge, Cambridge (未見)

No. Or 1368

紙*、200 葉*、6 行*。

サイズ：14-1/2 × 3 inches*.

日付：Samvat 818 (= 1698 A.D.)*

特記：Weiler[1956: xxxii]；Terakawa[1969: liii]。状態はかなり悪い模様。なお、上記“Or 1368”がいずれのカタログに基づくのか不明。ケンブリッジ所蔵写本の代表的カタログである Bendall[1883]では、＜悲華經＞梵本の写本としては、写本(8)の情報のみが収められている。

[フランス]

(10) Bibliothèque Nationale, Paris

No. 25. (Cabaton[1907: 4]；Filliozat[1941: 14])

紙、葉番号 1b-184a、6-7 行。

サイズ：33.0 × 10.0 cm*。

日付：なし

特記：Yamada[1968a: 8]；Weiler[1956: xxx]；Terakawa[1969: liii]；宇治谷祐顕[1969: 16ff.]。上記のカタログ番号と Weiler[1956: xxx] と Terakawa[1969: liii]で示されたカタログ番号(No. 114)とが異なるが、サイズ等から判断すると同一写本と思われる。

[インド]

(11) Asiatic Society of Bengal, Calcutta (未見)

No. A 16. (Mitra[1882: 285]；Nyāyabhūṣaṇa[1901: 245])

Yellow Nepalese Paper Ms.*、126 葉*、9-13 行*。

サイズ：13(-1/2) × 5-1/2 inches*。

日付：なし*

特記：Yamada[1968a: 8]；Weiler[1956: xxix]；Terakawa[1969: liii]。

岩本裕[1974: 206]によれば、＜悲華經＞の最初の校訂本であるDās刊本（Dās [1898]）は、本写本（岩本は詳細な情報こそ示していないが「カルカッタのアジア協会所蔵の写本」とする）に基づく出版であるとされる。また、荻原雲来[1972: 448]によれば、本写本は*Journal of the Buddhist Text and Anthropological Society*（カルカッタで発行）に公刊されたとあるが（巻数等不明）、同雑誌のvol.1-7を確認した限り、該当する内容は見当たらないようである。おそらく荻原の情報は、カルカッタから出版されたDās[1898]のことを指しているのではないかと推測される。

(12) Bombay Branch of the Royal Asiatic Society, Bombay（未見）

No. 205

紙*、228 葉*、6 行*。

サイズ：15.0 × 3-3/4 inches*。

日付：なし*

特記：Weiler[1956: xxxi-xxxii]；Terakawa[1969: liii]。

〔日本〕

(13) 東京大学図書館・河口コレクション、東京

New No. 78, (Kawaguchi Collection, No. 12). (Matsunami[1965: 33 & 195])

紙、葉番号 1b-170a（但し、第115葉以下の葉番号は変則）、9 行。

サイズ：32.3 × 12.1 cm*. (12-5/8 × 4-3/4 inches*)

日付：なし

特記：Yamada[1968a: 8]；Terakawa[1969: liv]；山田龍城[1959: 101]。

(14) 京都大学図書館・榊コレクション、京都

No. 14 (E 226). (Goshima & Noguchi[1983: 4-5])

紙、葉番号 1b-183b、9 行。

サイズ：33.8 × 13.0 cm*。

日付：Samvat 994 (= 1874 A.D.)。書写地sankhu。

特記：Yamada[1968a: 8-9]。なお、本写本とは明記されていないが、
岩本裕[1974]は和訳に際し、本写本を参照していると思わ
れる。(岩本裕[1974: 206]参照)。

(15) 京都大学図書館・榊コレクション、京都

No. 15 (E 227). (Goshima & Noguchi[1983: 4-5])

紙、葉番号 1b-174a、7-8 行。

サイズ：28.5 × 8.1 cm*。

日付：Samvat 890 (= 1770 A.D.)

特記：宇治谷祐顕[1969: 16-]。また、本写本とは明記されてい
ないが、岩本裕[1974]は和訳に際し、本写本を参照している
と思われる。(岩本裕[1974: 206]参照)。

(16) 龍谷大学図書館・大谷コレクション、京都

No. 610. (真田有美[1961: 108-109])

紙、葉番号 1b-172b (但し、第171葉に相当する内容が2葉 (種類)
あるので、全173葉である。)、7 行。

サイズ：10.5 × 40.0 cm*。

日付：Samvat 955 (= 1835 A.D.)。書写地patanの寺院。

特記：Yamada[1968a: 10]；成松 芳子[1976: 199]；石上 和 敬[1993:

29]。また、本写本は、CD-ROM版「龍谷大学図書館所蔵大谷探検隊収集梵文写本」第5巻（京都：龍谷大学、2001）に収められている。なお、真田有美[1961]では、一部ながら、本写本とDās[1898]刊本、写本(10)との比較対照を行なっている。

〔その他〕

(17) IASWRマイクロフィルム写本

Film-Strip No. MBB-1971-115-54

紙、葉番号 1b-184b、7 行。

サイズ：34 × 8 cm*。

日付：なし

特記：ニューヨークのIASWRが撮影したマイクロフィルムから知られる写本。但し、IASWRが当該写本を所蔵しているわけではなく、写本自体の収蔵場所は不明である⁵。石上和敬[1993: 29]。

〔中央アジア出土〕

(18) ドイツ・トルファン・コレクション、シオルチュク出土写本
(Sorcuq, Handschriften-Höhle, 3 Turfan-Expedition)

Nr. 976 (Waldschmidt[1971: 235-238])

紙*、葉番号 129a-b*、7 行。

サイズ：8.8 × 32.5 cm*。

日付：奥書部分を欠くため、確認できず。

特記：本写本の情報は、Waldschmidt[1971: 235-238]のみに基づく。
なお、同書には、同写本のローマ字転写（Waldschmidt[1971: 237-238]）、写真（Tafel 91）も掲載されている。発掘地の

ショルチュクは、クチャとトルファンの中に位置するカラシャール（焉耆）近郊にある。本写本は、筆者が収集した情報の中では、ネパール系以外の唯一の写本である。1葉（表裏）のみで、(KP,302,3-304,11)に相当する。文字は北トルキスタン・ブラーフミーのタイプa-bとされる。

その他の関連情報について：

Yamada[1968a: 10]；山田龍城[1959: 101]によれば、カトマンドウのBir Libraryに＜悲華經＞の写本1本があるとされる。同図書館の写本は後にカトマンドウのNational Archivesに移されたとされるので⁶、本稿で取り上げたNational Archives所蔵写本2本（写本(1)、写本(2)）のうちの1本かと推定されるが、詳細は現時点では不明である⁷。

なお、上記写本以外に、＜悲華經＞第2章に見られる陀羅尼の一部をその中心部分とし、＜悲華經＞第1章と第2章の内容を要約したかの如き、Sarvajñatākāradhārāṇiと称する単独經典の写本が何点か知られている。山田一止は二種類の写本に基づいて校訂を行なっている（Yamada[1968b: Part Two]）。このSarvajñatākāradhārāṇi写本はKaruṇāpundarīkaと密接な関係にあることは疑いないため⁸、現時点で把握できた写本の情報を下記に列挙する。

London: Royal Asiatic Society 写本（未見）

No. 55 (H. 147)

紙*、240葉*（左記のうち、51b6-59b6）、6行*。

サイズ：39.0 × 10.5 cm*。

日付：情報なし

特記：Yamada[1968b: Part Two 1]

東京：東京大学図書館 写本（未見）

New No. 416-VI (Matsunami[1965: 331-332])

紙*、117 葉*（左記のうち、40a1-46a2）、7 行*。

サイズ：38.4 × 10.6 cm*。

日付：情報なし

特記：Yamada[1968b: Part Two 1]。なお、Matsunami[1965: 331-332]

によれば、本写本の経題として Sarvajñatākāra-dhāraṇī or
Sarvajñatā-dhāraṇī とある。また、同カタログによれば、New
No. 419-III-155 という写本もあるとされる。

Paris: Societe Asiatique 写本（未見）

No. 45 (Filliozat[1945: 29])

Kathmandu: Āsā Archives 写本（未見）

No. 4413; 4414-156; 4418-6 (Yoshizaki[1991: 9])

1.1.2 刊本

1) *Karuṇapundarika, Edited with Introduction and Notes*, ed. by Isshi Yamada, vol.II (London: University of London, School of Oriental and African Studies, 1968)

（本稿では K P、または、Yamada[1968b] と表記。本校訂はサンスクリット写本 6 本（写本(7)(8)(10)(11)(13)(14)）を参照している）

書評（含：校訂上の問題点を指摘する研究も含む）：

Hurvitz[1969]; Kunst[1969]; May[1970]; Weller[1971]; 宇治谷祐顕[1971];
de Jong[1972]; 成松芳子[1976]

2) *Karuṇapundarika*, edited by Śarat Chandra Dās & Śarat Chandra Śāstri

(Calcutta: Buddhist Text Society of India, 1898) (未見)

(本稿ではDās[1898]と表記。現物未見のため断言はできないが、本校訂に際して利用したサンスクリット写本は、岩本裕[1974: 206]によれば、「カルカッタの王立アジア協会所蔵の写本による出版」とあり、写本(11)かと推測される。真田有美[1955: 9]も「刊行者は何等説明を加へて居ないのであるが、此刊本は多分ベンゴール亜細亜協会所蔵の写本を底本として出されたものと思はれる」とする。)

- 3) Weiler, Royal W., *The Karuṇāpundarīka: chapters I and II*, A dissertation in Oriental Studies, Presented to the Faculty of the Graduate School of the University of Pennsylvania in Partial Fulfillment of the Requirements for the degree of Doctor of Philosophy, 1956.

(〈悲華經〉第1章と第2章の校訂である。本稿ではWeiler[1956]と表記。本校訂はDās[1898]、及び、サンスクリット写本6本(写本(7)(8)(9)(10)(11)(12))を参照している)

- 4) Shunsho Terakawa, *The Karuṇāpundarīka: chapters V and VI*, A dissertation in Oriental Studies, Presented to the Faculty of the Graduate School of the University of Pennsylvania in Partial Fulfillment of the Requirements for the degree of Doctor of Philosophy, 1969.

(〈悲華經〉第5章と第6章の校訂である。本稿ではTerakawa[1969]と表記。本校訂はDās[1898]、及び、サンスクリット写本7本(写本(7)(8)(9)(10)(11)(12)(13))を参照している)

1.1.3. 現代語訳

- 1) 岩本裕[1974]

＜悲華經＞第1章～第4章までの抄訳。翻訳部分は、KPの頁数・行数で（1,4-21,4; 51,1-121,9; 217,15-249,10; 262,12-274,19. etc.）。（本和訳の底本については、「訳者は京都大学所蔵の二写本を参照し、また漢訳・チベット語訳を利用して、原典（=Yamada[1968b]。石上注）を校訂して、この和訳の底本とした」（岩本裕[1974: 206]）とある。岩本の言う「京都大学所蔵の二写本」の詳細は不明であるが、写本(14)と写本(15)ではないかと考えられる。なお、岩本によって校訂されたとされる底本自体についての情報は示されていない。）

2) Weiler[1956: 117-186]

＜悲華經＞第1章と第2章の英訳。（本英訳の底本はWeiler[1956]）

3) Terakawa[1969: 178-307]

＜悲華經＞第5章と第6章の英訳。（本英訳の底本はTerakawa[1969]）

4) 宇治谷祐顕[1969: 付録1-54]

＜悲華經＞第3章の和訳。（本和訳の底本については特に言及が見られないが、訳注等から推測するに、Dās[1898]を底本とし、写本(10)と写本(15)を対照しているかと思われる⁹⁾。）

1.2. チベット語訳諸本¹⁰⁾

筆者は現時点で、版本7本と写本6本の合計13本のチベット語訳＜悲華經＞の所在情報を確認し、その大半を複写等で入手した¹¹⁾。以下に諸本の基本情報を列挙する。

なお、＜悲華經＞チベット語訳の経題は下記の通りで諸本で概ね一致する。

経題：'pags-pa sniñ-rje pad-ma dkar-po shes-bya-ba theg-pa chen-po'i mdo

(梵語からの転写 ārya karuṇāpuṇḍarika nāma mahāyāna sūtra)

一方、翻訳者は下記4名の名が列記されるが、二人目の Surendrabodhi については、一部の写本では、Śilendrabodhi¹² となっている。

翻訳者：Jinamitra, Surendrabodhi, Prajñāvarma, Ye śe sde

＜チベット語訳諸本一覧の見方＞

1行目：略記号¹³と通称

2行目：カタログ番号とその典拠となるカタログ

3行目：巻数、葉番号等、及び、一葉内の行数

4行目以下：特記事項。なお、各版本の開版年代、各写本の書写年代等については、専門の研究に譲る。

1.2.1. 版本

蔵P. 北京版

No. 780 大谷大学[1985: 116]

Location: mdo, cu 149a5-337a8, 8行.

特記：本版については、大谷大学所蔵版本を公刊した『影印北京版西藏大蔵経—大谷大学図書館蔵』第29巻、甘殊爾、諸経部3（東京・京都：西藏大蔵経研究会、1958）：191.5-267.1を利用した。

蔵N. ナルタン版

No. 100 長島尚道[1975: (756)]

Location: mdo, cha 187b7-443a4, 7行。

特記：本版については、(財) 東洋文庫所蔵版の複写を利用した。

蔵D. デルゲ版

No. 112 宇井伯寿[1934: 26]

Location: mdo sde, cha 129a1-297a6, 7 行.

特記：本版については、*The Tibetan Tripitaka, Taipei Edition*, vol. XI (台北：南天書局有限公司、1991)：37-85を利用した。

蔵C. チョーネ版

No. 753 Mibu[1959: 23]

Location: mdo mañ, cha 159a3-350a3, 8 行.

特記：本版については、(財) 東洋文庫所蔵版の複写を利用した。

蔵J. ジャンサタム・リタン版

No. 57 Imaeda[1984: 31]

Location: mdo mañ, cha 141a2-313a8, 8 行.

特記：本版については、ベルリンのSTAATSBIBLIOTHEK ZU BERLIN - Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung所蔵のマ
イクロフィルムからの複写を利用した。

蔵U. ウルガ版

No. 112 Bethlenfalvy[1980: 35]

Location: mdo sde, cha pa 128a4-296a6, 7 行.

特記：本版については、Lokesh Chandra ed., *URGA KANJUR*, vol. 50, (Śata-piṭaka Series, vol. 445) (New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1992)を利用した。
Bethlenfalvy[1980: 4]によれば、1908-1910年にモンゴルのウランバートルで開版された本版は、デルゲ版の改訂版
("a revised and corrected reprint of the Derge Kanjur")に近

いとのこと。葉・行においても、デルゲ版に基本的に従っているという。

蔵H. ラサ版

No. 115 高崎直道[1965: 15-15']

Location: mdo, cha 209b7-474a7, 7 行.

特記：高崎直道[1965: 凡例]によれば、本版は「第十三世ダライ・ラマ欽定版」とある。なお、高崎直道[1965: 15]には、経題としてラサ版の「略目録」に従った略名 *sñiñ rje pad ma dkar po, de bshin gsegs pañi shal chems* が掲げられているが、実際には他の諸本同様の経題である。1934年頃の完成とされる本版はナルタン版を底本としており、經典配列順序も概ねナルタン版に一致するようである。また、デルゲ版をも参照した形跡が見られるという¹⁴。本版本については、国際仏教学大学院大学附属図書館蔵のゼロックスコピー本を利用した。

1.2.2. 写本

蔵S. トックパレス写本

No. 45 Skorupski[1985: 84]

Location: na 1b1-240a5, 7 行.

特記：本写本については、オフセット印刷版(*The Tog Palace Manuscript of the Tibetan Kanjur, Smarntsis Shesrig Dpemzod*, vol. 55, Leh, 1979)を利用した。

蔵T. 東洋文庫写本

No. 45 斎藤光純[1977: (363)]

Location: mdo sde, na 1a1-223b6, 8 行.

特記：本写本については、(財) 東洋文庫所蔵本の複写を利用した。

蔵 L. ロンドン・シェルカル写本

No. 20 Pagel & Gaffney[1996: 19]

Location: mdo, na (vol.4) 1b1-210b3, 8 行.

特記：本写本はロンドンのBritish Libraryからマイクロフィッシュとして公刊されている。筆者は東京大学インド哲学仏教学研究室所蔵の同マイクロフィッシュを利用した。

蔵 F. プダク写本

No. 88 Samten[1992: 41]

Location: mdo sde, cha 1b1-235a7, 8 行.

特記：本写本はニューヨークのIASWRからマイクロフィッシュとして公刊されている。筆者は東京大学インド哲学仏教学研究室所蔵の同マイクロフィッシュを利用した。なお、本写本は翻訳者名などに言及する奥書を欠く。

蔵 B. ベルリン写本

mdo Band (58)-3 Beckh[1914: 31]

Location: mdo, cha 159a8-360a8, 8 行.

特記：本写本はSTAATSBIBLIOTHEK ZU BERLIN - Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung所蔵であるが、同所蔵のマイクロフィルムからの複写を利用した。

蔵M. ウランバートル写本

No. 92 Bethlenfalvy[1982: 21]

Location: mdo, na 1na1-216ba2*.

特記：本写本は上記Bethlenfalvy[1982]カタログにより所在は確認できるが、筆者未見である。

1.3. 漢訳諸本¹⁵

＜悲華經＞の漢訳としては、曇無讖訳『悲華經』十巻と失訳『大乘悲分陀利經』八巻の二種類の漢訳が現存する¹⁶。

1.3.1. 曇無讖訳『悲華經』十巻

漢訳者名：北涼 曇無讖¹⁷

訳出年代：北涼の玄始八年十二月（西暦419年）¹⁸

1.3.1.1. 蔵経本

悲T. 大正新脩大蔵経

高楠順次郎・渡辺海旭編『大正新脩大蔵経』第三巻(本縁部 上)(東京：大蔵出版、1924)：167a1-233c8。なお、大正蔵の番号では第157経。

また、大正蔵版に基づく国訳（書き下し）が、赤沼智善・西尾京雄訳、新井慧誉校訂『国訳一切経 経集部五』（東京：大東出版社、1996）に収載されている。

悲K. 高麗版大蔵経

再雕本（1251年完成）の影印版が『高麗大蔵経』全48巻（ソウル：東国大学校、1957～）として出版されている。『悲華經』は第九巻（大般涅槃經 外二十五部）：1195-1290に収められている。

悲C．金版大藏經

古くは「趙城藏」。中華大藏經編輯局編『中華大藏經』（漢文部分）第一六冊（北京：中華書局、1986）：120-245所載の『悲華經』十巻が金藏広勝寺本を底本としているので、それを利用した。但し、同書では、『悲華經』巻二のみは高麗藏を底本としているので注意を要する。なお、『中華大藏經』（漢文部分）では、各巻末に他の諸本の異読がまとめられており、『悲華經』に関しては、房山石經、資福藏、磧砂藏、高麗藏、普寧藏、永樂南藏、徑山藏、清藏の八本の異読が示されている¹⁹。

悲G．福州版大藏經

宋代のいわゆる江南諸藏の一つ。福州版については、東禪等覺院版（東禪寺版、崇寧藏）と開元禪寺版（開元寺版、毘盧藏）の二種類があるが、筆者はその両版を混合した形態の宮内庁書陵部藏の「一切經」からの複写を利用した。『悲華經』については、冒頭に東禪等覺院版であることが明記されている。カタログは、『和漢図書分類目録』上巻（東京：宮内庁書陵部、1951）273頁。

悲S．思溪版大藏經

宋代のいわゆる江南諸藏の一つで、一般に宋版大藏經と呼ばれるもの。思溪藏については、円覺藏（前思溪藏）と資福藏（後思溪藏）の二種類が知られており、両者の関係については結論を見ていないようだが²⁰、筆者は増上寺藏「宋版大藏經（經番号129）」の複写を利用した²¹。目録は「増上寺三大藏經目録 宋版（五大部外諸重訳經）」（『増上寺史料集別巻』東京：増上寺、1981）86頁。

悲J．磧砂版大藏經

磧砂蔵は、宋代に磧砂延聖院から開版され、元末に完成したとされる。磧砂蔵については、以下の影印版2点が出版されている。『影印宋元版 磧砂大蔵經』第二八冊（北京：綫装書局、2005）：329-481。また、延聖院大蔵經局編『宋版 磧砂大蔵經』第九冊（台北：新文豊出版、1987）：446-508。（後者には經番号（第128）が付されている）。両者の内容は同一である。但し、卷三については、磧砂蔵ではなく、思溪蔵（北平松坡図書館蔵）から補った内容である。なお、大阪の武田科学振興財団・杏雨書屋にも磧砂大蔵經が所蔵されているが、『悲華經』については上記の影印版とは全巻、別本である。同書屋所蔵本の卷五と卷八の刊記には、「杭州路南山大普寧寺大蔵經局伏承」とあり、元代の普寧蔵から補われたものと推測される。

この他にも、元・明・清代の版本蔵經が複数知られており、参照可能な蔵經も存在するが、本稿は＜悲華經＞の梵蔵漢比較研究の基礎資料という性格から、取りあえず、上記の蔵經を参照するにとどめている²²。（この点、『大乘悲分陀利經』についても同じ）

1.3.1.2. 石經

悲F. 房山石經²³

房山雲居寺石經（遼金刻經）。大安2（1086）年の刻印。

中国仏教協会・中国仏教図書文物館編『房山石經』（遼金刻經）第10冊（北京：華夏出版社、2000）：22-57を利用した。剥落等のため一部に判読不明の箇所があるものの、基本的に十巻全体を参照することができる。なお、『悲華經』の同全集内での經番号は409。

1.3.1.3. 敦煌写本

悲D 1. 北京図書館所蔵 No. 北456 (重38)

「悲華經 卷第五 諸菩薩本授記品第四之三」の一部
(T3,196a,1-b,6)

『敦煌寶藏』第59冊：241を利用した。カタログ：商務印書館[1962: 74?; 456]；敦煌研究院[2000: 508]

悲D 2. 北京図書館所蔵 No. 北457 (夜93)

「悲華經 卷第五諸 菩薩本授記品第四之三」の一部(T3,200b,29-202a,24)

『敦煌寶藏』第59冊：242-244を利用した。カタログ：商務印書館[1962: 66; 456]；敦煌研究院[2000: 492]

悲D 3. 大谷大学図書館所蔵 No. 散719

「悲華經 卷第二 大施品第三之一」の一部(T3,176c,14-179c5)

本写本については大谷大学図書館所蔵写本の複写を利用した。カタログ：商務印書館[1962: 329; 456]。

悲D 4. 劉幼雲蔵敦煌卷子目録 No. 散645 (未見)

「悲華經 卷第四」

参考：カタログ：商務印書館[1962: 326; 456]

悲D 5. 徳化李氏出售敦煌写本目録 No. 散551 (未見)

「悲華經 卷第四」

参考：カタログ：商務印書館[1962: 324; 456]。

悲D 6. ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ

支所所蔵 No. Φ 232

「悲華經 卷第二 大施品第三之一」の一部(T3,179a,13-181b,8)

本写本については、『俄藏敦煌文献』[1993: 318-322]所載の写真版を利用した。カタログは国際仏教学大学院大学附属図書館[2006: 9]。

悲D 7. ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ
支所所蔵

No. Д x 00184-01

「悲華經 卷第五 諸菩薩本授記品第四之三」の一部(T3, 196c, 11-24)

本写本については、『俄藏敦煌文献』[1996: 123]所載の写真版を利用した。カタログは国際仏教学大学院大学附属図書館[2006: 9]。

悲D 8. ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ
支所所蔵

No. Д x 00184-02

「悲華經 卷第五 諸菩薩本授記品第四之三」の一部(T3, 197a, 10-16)

本写本については、『俄藏敦煌文献』[1996: 124]所載の写真版を利用した。カタログは国際仏教学大学院大学附属図書館[2006: 9]。

悲D 9. ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ
支所所蔵

No. Д x 00184-03

「悲華經 卷第五 諸菩薩本授記品第四之三」の一部(T3, 197a, 24-b, 2)

本写本については、『俄藏敦煌文献』[1996: 124]所載の写真版を利用

用した。カタログは国際仏教学大学院大学附属図書館[2006: 9]。

1.3.1.4. トルファン写本

悲 T U. 出口常順蔵 PL. IX B30

「悲華經 卷二 大施品第三之一」の一部(T3, 175a, 8-11)

藤枝晃[2005: 26; 75]に写真と解説が掲載されている。上記の整理番号も同書に基づくもの。4行、16文字のみの断片。天地、左右も欠く。

1.3.1.5. 日本古写経

悲 S S. 正倉院聖語蔵

宮内庁正倉院事務所蔵聖語蔵経巻に『悲華經』全十巻が含まれている。筆者は、カラーCD-ROM版「宮内庁正倉院事務所蔵聖語蔵経巻」第2期 天平12年御願経1（東京：丸善、2001）を利用した。

この他に、未見ではあるが、金剛寺一切経（大阪府河内長野市）、七寺一切経（名古屋市）、石山寺一切経（滋賀県大津市）、興聖寺一切経（京都市）、西方寺一切経（奈良県大和郡山市）、新宮寺一切経（宮城県名取市）、松尾社一切経（京都市）などに、『悲華經』の全体、または、一部が現存しているとされる（国際仏教学大学院大学[2006]）。奈良・平安期の古写経に対する中国・唐代の影響については近年、その関連が大きく注目されているため、〈悲華經〉の梵藏漢比較研究の基礎的作業という本稿の性格からも日本の奈良・平安期の古写経は軽視することができない。

ところで、曇無讖訳『悲華經』巻六～巻八に見られる釈迦如来の誓願関連の部分に増広改変を加えて再編したと推測される「釈迦

如来五百大願（經）」と称する仏典が平安末から鎌倉期にかけて流行したと考えられている。筆者においては、日本における〈悲華經〉受容の様態を窺う好適な資料であるこの「釈迦如来五百大願（經）」も含めて、日本の〈悲華經〉関係の古写経について、別稿を用意する予定である。

1.3.2. 失訳『大乘悲分陀利經』八卷

経題については『大乘悲分陀利經』²⁴だけでなく、『大乘大悲分陀利經』²⁵；『大悲分陀利經』²⁶などとなっている場合もある。

漢訳者名：失訳

訳出年代：秦代（前秦〔苻氏〕は西暦351年～394年、後秦〔姚氏〕は西暦384年～417年、西秦〔乞伏氏〕は385年～431年）

1.3.2.1. 蔵経本

大T. 大正新脩大蔵経

高楠順次郎・渡辺海旭編『大正新脩大蔵経』第三卷（本縁部 上）（東京：大蔵出版、1924）：233c10-289a25。なお、大正蔵の番号では第158経。

大K. 高麗版大蔵経

再雕本（1251年完成）の影印版が『高麗大蔵経』全48卷（ソウル：東国大学校、1957～）として出版されている。『大乘悲分陀利經』は第九卷（大般涅槃經 外二十五部）：1113-1194に収められている。

大C. 金版大蔵経

古くは「趙城蔵」。中華大蔵経編輯局編『中華大蔵経』（漢文部分）第一六冊（北京：中華書局、1986）：14-119所載の『大乘悲分陀利經』

八巻が金蔵広勝寺本を底本としているので、それを利用した。但し、同書では、『大乘悲分陀利經』巻二と巻四は高麗蔵を底本としているので注意を要する。なお、『中華大蔵經』（漢文部分）では、各巻末に他の諸本の異読がまとめられており、『大乘悲分陀利經』に関しては、資福蔵、磧砂蔵、高麗蔵、普寧蔵、永樂南蔵、徑山蔵、清蔵の七本の異読が示されている

大G．福州版大蔵經

宋代のいわゆる江南諸蔵の一つ。福州版については、東禪等覺院版（東禪寺版、崇寧蔵）と開元禪寺版（開元寺版、毘盧蔵）の二種類があるが、筆者はその両版を混合した形態の宮内庁書陵部蔵の「一切經」を利用した。『大乘大悲分陀利經』については、冒頭に開元禪寺版であることが明記されている。（但し、巻四の始めの部分は東福等覺院版となっている）。なお、本版では、經題が「大乘大悲分陀利經」となっている。カタログは、『和漢図書分類目錄』上巻（東京：宮内庁書陵部、1951）273頁。

大S．思溪版大蔵蔵

宋代のいわゆる江南諸蔵の一つで、一般に宋版大蔵經と呼ばれるもの。思溪蔵については²⁷、増上寺蔵「宋版大蔵經（經番号128）」を利用した。本版の經題は「大乘大悲分陀利經」となっている。目錄は「増上寺三大蔵經目錄 宋版（五大部外諸重訳經）」（『増上寺史料集別巻』東京：増上寺、1981）85-86頁。

大J．磧砂版大蔵經

磧砂蔵については、以下の影印版2点が出版されている。『影印宋元版 磧砂大蔵經』第二八冊（北京：綫装書局、2005）：

198-328。また、延聖院大藏經局編『宋版 磧砂大藏經』第九冊（台北：新文豐出版、1987）：392-445。（後者には經番号（第127）が付されている）。両者の内容は同一である。なお、經題は「大乘大悲分陀利經」となっている。なお、大阪の武田科学振興財団・杏雨書屋にも磧砂大藏經が所蔵されているが、『大乘大悲分陀利經』については上記の影印版とは全巻、別本である。同書屋所蔵本の巻四の刊記には、「杭州路南山大普寧寺大藏經局伏承」とあり、元代の普寧藏から補われたものと推測される。

(1.3.2.2. 石經)

（房山石經には、目録類による限り、『大乘悲分陀利經』に該当する經典は見当たらない。中国仏教協會・中国仏教図書文物館編『房山石經』（目録索引30）（北京：華夏出版社、2000）；氣賀澤[1996: 439-477]）

1.3.2.3. 敦煌写本

大D 1. スタイン収蔵 No. S. 6456

「大乘悲分陀利經 卷第三」のほぼ全体（T3, 249b, 11-256b, 10）

（財）東洋文庫所蔵のマイクロフィルムからの複写を利用した。なお、本写本では經題が「大悲分陀利經」となっている。カタログ：敦煌研究院[2000: 201]。

大D 2. ペリオ収蔵 No. P. 2225

「大乘悲分陀利經 卷第三 離諍王授記品第六」の一部（T3, 250a, 2-250b, 27）

（財）東洋文庫所蔵のマイクロフィルムからの複写を利用した。なお、本写本中には經題の部分は含まれていない。カタログ：敦煌

研究院[2000: 229]。

1.3.2.4. 日本古写経

大S S. 正倉院聖語蔵

宮内庁正倉院事務所所蔵聖語蔵経巻に『大乘悲分陀利経』の巻第三が含まれている。筆者は、カラーCD-ROM版「宮内庁正倉院事務所所蔵聖語蔵経巻」第2期 天平12年御願経2（東京：丸善、2002）を利用した。

この他に、未見ではあるが、金剛寺一切経（大阪府河内長野市）、七寺一切経（名古屋市）、石山寺一切経（滋賀県大津市）、興聖寺一切経（京都市）、新宮寺一切経（宮城県名取市）、松尾社一切経（京都市）などに、『大乘悲分陀利経』の全体、または、一部が現存しているとされる（国際仏教学大学院大学[2006]）。

1.4. トカラ語（関連写本）

シルヴァン・レヴィは、ペリオ収集のトカラ語写本の中に、＜悲華経＞と共通する登場人物名等があることを指摘している（Lévi[1912]）。但し、同写本は＜悲華経＞のトカラ語版と言えるほどのものではない。

上記のレヴィの指摘については、Yamada[1968a: 117]; Weiler[1956: xxvi-xxviii]も参照。

2. Mahajjātakamālā

Mahajjātakamālāは＜悲華経＞の一部を詩文化した内容を含む文献で、＜悲華経＞研究には参照が不可欠と考えられる文献である。本

稿では、下記のサンスクリット語校訂テキストが刊行されていることを紹介するに留める。

Der Grosse Legendenkranz (Mahajjātakamālā), Eine mittelalterliche buddhistische Legendensammlung aus Nepal, Nach Vorarbeiten von Gudrun Bühnemann und Michael Hahn, herausgegeben und eingeleitet von Michael Hahn (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1985)

書評：

de Jong[1988]

書評ではないが、上記の校訂本を含めて、Mahajjātakamālā に関する情報は、下記のホームページ（岡野潔[2004]）に詳しい。

<http://homepage3.nifty.com/indology/mahajjatakamala.html>

<謝辞>

本稿作成にあたり、梵藏漢の写本、版本等の複写等の利用、及び閲覧に際して、各種史資料の下記の所蔵機関及び関係各位には、格別のご高配を賜わった。ここに記して甚深なる謝意を表したい。同時に、本文中にてその都度謝意を記さなかった点、ご海容頂きたい。

(国内)

国際仏教学大学院大学附属図書館、東京大学文学部インド哲学仏教学研究室（及び種村隆元助教）、東京大学総合図書館、京都大学図書館（及び文学研究科）、龍谷大学図書館、大谷大学図書館、（財）東洋文庫、大本山増上寺、宮内庁書陵部、（財）武田科学振興財団、成松芳子氏、渡辺浩希氏。

(国外)

STAATSBIBLIOTHEK ZU BERLIN - Preussischer Kulturbesitz,

Orientabteilung, Berlin ; Nepal-German Manuscript Cataloguing Project, Kathmandu ; Royal Asiatic Society, London ; University Library of Cambridge, Cambridge ; Bibliothèque Nationale, Paris.

注

- 1 関連資料の収集にあたり、堀伸一郎・国際仏教学大学院大学附置国際仏教学研究所・副所長、並びに、江田昭道・浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター研究員にご懇切なご教示を賜わった。記して謝意を表したい。また、資料収集に際しては、本稿末尾に掲げた収蔵先の各機関にご高配を賜わったが、特に、国際仏教学大学院大学附属図書館、東京大学文学部インド哲学仏教学研究室、並びに、カトマンドウのNepal-German Manuscript Cataloguing Projectには、一再ならず格別のご配慮を賜わった。記して謝意を表したい。
- 2 <悲華經>という表示法は、<無量寿經>等の浄土系大乘經典に関する代表的な研究である藤田宏達[2007: 4]の用法に倣うものであり、本稿でも、梵本で*Karuṇāpundarīka*と称される大乘經典の「諸異本のもとなった種々な原本（サンスクリット語もしくはプラークリット語で書かれたもの）の全体を総称する經名」として用いることにする。
- 3 なお、筆者自身も<悲華經>の関連資料について15年ほど前に一度まとめたことがある（石上和敬[1993]）。本稿は、前稿を大幅に増補するものである。
- 4 奥書の解説、及び、書写年代の西暦への換算については、堀伸一郎・国際仏教学大学院大学附置国際仏教学研究所・副所長にご教示を賜わった。記して謝意を表したい。
- 5 田中公明・吉崎一美[1998: 109]参照。
- 6 森口光俊[1989: xiv-xv]；田中公明・吉崎一美[1998: 107-108]；藤田宏

達[1973: 225]等。

- 7 大正大学梵文学研究室作成のBir Libraryのカタログ（同[1955: (13)]）には、「122. Karuṇā-puṇḍarīka, te 590/2 Karuṇā-puṇḍarīkam (Complete, D), (以下は東大所蔵写本の情報等なので省略。石上)」とあり、当該写本がデーヴァナーガリー書体であることはわかるが、それ以上の情報はない。
- 8 山田一止による校訂の末尾には、ity āryaśrīkaruṇāpūṇḍarīkamahā-yānasūtre iyaṃ sarvajñatākāradhārāṇi samāptā// (Yamada[1968b: Part Two 22]) ともある。
- 9 宇治谷祐顕[1969]に対する「書評」である吉元信行[1970: 88]は、「先ず「梵文悲華經大施品訳注」はK本（＝本稿の写本(15)。石上注）を底本に、C本（＝本稿のDās[1898]。石上注）、P本（＝本稿の写本(10)、石上注）、両漢訳等を参照した厳密な翻訳である」とするが、愚見は本文に示した通りである。
- 10 チベット訳諸本の所在情報、入手情報等については、佐藤直実[2008]；Silk[1994a]；Silk[1994b]等から有益な情報を得ることができた。
- 11 13本のうち、蔵M：ウランバートル写本は現時点で参照することができていない。
- 12 蔵S；蔵T；蔵Lでは、Śilendrabodhi(S: 240a4, T: 223b5, L: 210b3)とある。なお、SurendrabodhiとŚilendrabodhiとはほぼ同時期に仏典の蔵訳等において活躍した僧である。仏典の蔵訳者名として複数名が列記される場合、記名順が何らかの序列を反映しているとするならば（原田覚[1985: 430]）、原田覚の次の指摘は参考になる。「また彼（＝ジュニャーナガルバ。石上注）が大乗中観師と呼称されたのも当然であり、その先輩インド僧にブラジュニャーヴァルマ、さらにその先輩インド僧にスレーンドラボーディがおり、この僧（＝ジュニャーナガルバ。石上注）の後輩にシーレーンドラボーディ、或いはダーナシーラがおり、先輩

- にジナミトラがいたと推定し得ることとなる」(原田覚[2001: 426])。つまり、この原田覚の指摘に基づいて、奥書に記されたプラジュニャーヴァルマとの記名順を考慮するならば、当該箇所は、シーレーンドラボーディではなく、スレーンドラボーディである可能性が高いことになる。(原田覚[1985: 428-431]；原田覚[2001: 422-426]等参照)
- 13 チベット語訳の諸本の略号については、Harrison & Eimer[1997: xi-xiv]を参考にするが、一部、変更を加える。
- 14 Harrison[1992: 79]；佐藤直実[2008: 84]
- 15 漢訳諸本の所在情報、入手方法等については、落合俊典・国際仏教学大学院大学教授よりご懇切なご指導を賜わった。記して謝意を表したい。また、漢訳諸本の概要把握、資料収集のために、竺沙雅章[2000: 271-291]；椎名宏雄[2006]；Deleanu[2006: 106-146]；Zacchetti[2005: 74-142]；藤田宏達[2007]所載の「浄土三部経の諸本対照表」等から有益な情報を得ることができた。
- 16 漢訳者、訳出年代等、漢訳に伴う諸問題についてはここでは立ち入らないが、それらについては、Yamada[1968a: 15-20]；真田有美[1955]等がまずは参照されるべきである。
- 17 曇無讖関連の諸情報については、先行研究も含めて船山徹[1995: 6-12]を参照。
- 18 この訳出年代は『出三蔵記集』卷二 (T55,11b) に基づくもので、先行研究は概ねこの情報に拠っている。
- 19 但し、この校合の精度には問題があるとされる。藤谷昌紀[2005: 22-23]。
- 20 Zacchetti[2005: 113-114]；Deleanu[2006: 140]。
- 21 増上寺の思溪蔵が円覚蔵か資福蔵かの問題について、『増上寺三大蔵経目録解説』(増上寺, 1982) には、「増上寺宋版はほぼ円覚禅院本と決定された」(p.21) などとある。なお、筆者が参照し得たのは『悲華経』

の本文部分の複写のみのため、刊記等の調査を今後の課題としたい。

22 元代以降の蔵経（普寧蔵、洪武南蔵、永楽南蔵、永楽北蔵、嘉興蔵（徑山蔵）、龍蔵（乾隆蔵）など）は、先行研究によれば、概ね、本稿で参照した版本蔵経の流れを汲むものとされる。（Deleanu[2006: 130]；Zacchetti[2005: 133]；椎名宏雄[2006]等を参照）

23 房山石経関連の諸情報については、爪田一寿・武蔵野大学専任講師よりご教示頂いた。記して謝意を表したい。

24 大T；大K；大C；大SS。

25 大G；大S；大J，他に、大正蔵の脚注によれば、宋・元・明の三本。また、清代の「乾隆蔵」も「大乘大悲分陀利経」とある。

なお、経題のこのような相違を竺沙雅章[2000: 281-289]の大蔵経の系統分類に当てはめてみると、大蔵経の三系統のうち、概ね、第一類蔵経が「大乘悲分陀利経」、第三類蔵経が「大乘大悲分陀利経」となっていることになる。

26 大D 1

27 思溪蔵については、『悲華経』の思溪蔵の項も参照。

〔略号：雑誌名〕

BSOAS: Bulletin of the School of Oriental and African Studies, Univ. of London, London

IJ: Indo-Iranian Journal, Den Haag, Dordrecht

JA: Journal Asiatique, Paris

JAOS: Journal of the American Oriental Society, New Haven

JRAS: Journal of the Royal Asiatic Society, London

OLZ: Orientalistische Literaturzeitung, Berlin

石上和敬

- 1993 「Karunāpundarika研究序説」『インド哲学仏教学研究』1:
21-36.

岩本裕

- 1974 「悲華經（抄）」『仏教聖典選 第六卷 大乘經典 四』（東
京：読売新聞社）203-340

宇井伯寿

- 1934 宇井ほか編『西藏大藏經総目録－東北帝国大学蔵版』（仙台：
東北帝国大学）

宇治谷祐顕

- 1969 『悲華經の研究』（名古屋：文光堂）
1971 「書評：Karunāpundarika」『鈴木学術財団研究年報』5-7
(1968-1970): 85-87.

大谷大学

- 1985 大谷大学監修『大谷大学図書館蔵 影印北京版 西藏大藏
經 総目録・索引』（京都：臨川書店）

岡野潔

- 2004 <http://homepage3.nifty.com/indology/mahajatakamala.html>（年号
は更新日）

荻原雲来

- 1972 「世に知られたる梵語仏典」『荻原雲来文集』（東京：山喜
房仏書林）445-460.（原著は『東亜の光』IX-6 (1914)所収。）
『俄藏敦煌文献』

- 1993 俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所他編『俄羅斯科学院
東方研究所聖彼得堡分所蔵敦煌文献』④（上海：上海古籍
出版社）
1996 俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所他編『俄羅斯科学院

東方研究所聖彼得堡分所藏敦煌文献』⑥（上海：上海古籍出版社）

氣賀澤保規

1996 氣賀澤編『中国仏教石經の研究－房山雲居寺石經を中心に』（京都：京都大学学術出版会）

国際仏教学大学院大学

2006 国際仏教学大学院大学 学術フロンティア実行委員会編『日本現存八種一切經対照目録』（東京：国際仏教学大学院大学）

国際仏教学大学院大学附属図書館

2006『大正蔵・敦煌出土仏典対照目録』第2版（東京：国際仏教学大学院大学附属図書館）

斎藤光純

1977「河口慧海師将来東洋文庫所蔵 写本チベット大蔵經調査備忘」『大正大学研究紀要－仏教学部・文学部』63: (406)-(345).

佐藤直実

2008『蔵漢訳『阿闍世王經』研究』（東京：山喜房仏書林）

真田有美

1955「悲華經について」『日本仏教学会年報』21: 1-14.

1961「大谷探検隊将来 梵文仏典資料」『西域文化研究 第四 中央アジア古代語文献』（京都：法蔵館）

椎名宏雄

2006「大蔵經の開版」岡部和雄・田中良昭編『中国仏教研究入門』（東京：大蔵出版）44-61.

商務印書館

1962 商務印書館編『敦煌遺書總目索引』（北京：商務印書館）

大正大学梵文学研究室

- 1955 “Buddhist Manuscripts of The Bir Library”, 『大正大学研究紀要－仏教学部・文学部』 40: (1)-(30).
- 高崎直道
- 1965 高崎編『東京大学所蔵 ラサ版チベット大蔵経目録』(東京: 東京大学文学部)
- 田中公明・吉崎一美
- 1998 『ネパール仏教』(東京: 春秋社)
- 竺沙雅章
- 2000 『宋元仏教文化史研究』(東京: 汲古書院)
- 敦煌研究院
- 2000 敦煌研究院編『敦煌遺書總目索引新編』(北京: 中華書局)
- 『敦煌寶藏』
- 1981 黄永武主編『敦煌寶藏』全 1 4 0 冊(台北: 新文豐出版公司)
- 長島尚道
- 1975 「大正大学所蔵チベット大蔵経・ナルタン版甘殊爾目録」『大正大学研究紀要』 61: (760)-(726).
- 成松芳子
- 1976 「悲華経における三昧について」『印度学仏教学研究』 24-2: 195-200.
- 原田覚
- 1985 「吐蕃訳経史」山口瑞鳳編『講座敦煌 6 敦煌胡語文献』(東京: 大東出版社) 419-448.
- 2001 「吐蕃に於ける僧伽と中観論書の蔵訳」『江島恵教博士追悼論集 空と実在』(東京: 春秋社) 417-429.
- 藤枝晃
- 2005 藤枝編著『トルファン出土仏典の研究－高昌残影积録』(京都: 法蔵館)

藤田宏達

- 1973 「カトマンドゥにおけるSukhāvativyūhaの写本」『中村元博士還暦記念論集 インド思想と仏教』（東京：春秋社）223-236.

2007 『浄土三部経の研究』（東京：岩波書店）

藤谷昌紀

- 2005 「『菩薩瓔珞本業経』の諸本について－近年の大蔵経研究の動向を踏まえて」『仏教学セミナー』81: 18-44.

船山徹

- 1995 「六朝時代における菩薩戒の受容過程－劉宋・南斉期を中心に」『東方学報』京都 67: 1-135.

森口光俊

- 1989 『ネパール国立古文書館所蔵 サンスクリット密教文献目録』（東京：山喜房仏書林）

山田龍城

- 1959 『梵語仏典の諸文献－大乘仏教成立論序説 資料篇』（京都：平楽寺書店）

吉元信行

- 1970 「書評：宇治谷祐顕著『悲華経の研究』」『大谷学報』49-3: 85-89.

Beckh, Hermann

- 1914 *Die Handschriften-Verzeichnisse der Königlichen Bibliothek zu Berlin*, 24 Band, Verzeichnis der Tibetischen Handschriften (Berlin: Behrend & Co)

Bendall, Cecil

- 1883 *Catalogue of the Buddhist Sanskrit Manuscripts in the University Library, Cambridge* (London: Cambridge University Press)

Bethlenfalvy, Géza

- 1980 *A Catalogue of the URGA KANJUR, Śāta-Pitaka Series*, vol. 246
(New Delhi: The International Academy of Indian Culture)
- 1982 *A Hand-List of the Ulan Bator Manuscript of the Kanjur RGYAL-RTSE THEM SPANŚ-MA* (Budapest: Akadémiai Kiadó)

Cabaton, Aotoine

- 1907 *Catalogue Sommaire des Manuscrits Sanscrits et Pālis*, 1er fascicule, manuscrits sanscrits (Paris: Bibliothèque Nationale)

Cowell, Edward Byles & Eggeling, Julius

- 1876 “Catalogue of Buddhist Sanskrit Manuscripts in the possession of the Royal Asiatic Society (Hodgson Collection)”, *JRAS New Series* 8: 1-52.

Dās, Śarat Chandra

- 1898 *Karunāpundarika*, edited by Śarat Chandra Dās & Śarat Chandra Śāstri (Calcutta: Buddhist Text Society of India)

de Jong, Jan Willem

- 1972 “Review: *Karunāpundarika*”, *IJJ* 13: 301-313.
- 1988 “Review: Michael Hahn, *Der Grosse Legendenkranz*”, *IJJ* 31: 156-158.

Deleanu, Florin

- 2006 *The Chapter on the Mundane Path (Laukikamārga) in the Śrāvakabhūmi: A Trilingual Edition (Sanskrit, Tibetan, Chinese), Annotated Translation, and Introductory Study*, 2vols, *Studia Philologica Buddhica, Monograph Series XX* (Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies)

Filliozat, Jean

- 1941 *Bibliothèque Nationale, Catalogue du Fonds Sanscrit, fascicule I*,

Nos. 1 à 165 (Paris: Adrien-Maisonneuve)

- 1945 “Catalogue des manuscrits sanskrits et tibétains de la Société Asiatique”, *JA* CCXXXIII, Année 1941-42: 1-81.

Goshima, Kiyotaka & Noguchi, Keiya

- 1983 *A Succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Possession of the Faculty of Letters, Kyoto University* (Kyoto: Kyoto University)

Harrison, Paul

- 1992 “Meritorious Activity or Waste of Time? Some Remarks on the Editing of Texts in the Tibetan Kanjur”, *Tibetan Studies: Proceedings of the 5th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Narita 1989* (Narita: Naritasan Shinshoji)

Harrison, Paul & Eimer, Helmut

- 1997 “Kanjur and Tanjur Sigla: A Proposal for Standardisation”, Helmut Eimer ed. *Transmission of the Tibetan Canon* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften): xi-xiv.

Hurvitz, Leon

- 1969 “Review: *Karunāpundarika*”, *JAOS* 89-3: 651-654.

Imaeda, Yoshiro

- 1984 *Catalogue du Kanjur tibétain de l'édition de 'Jang sa-tham, Seconde Partie, Texte en translittération, Bibliographia Philologica Buddhica, Series Maior II -b* (Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies)

Kunst, Arnold

- 1969 “Review: *Karunāpundarika*”, *BSOAS* 32-3: 627-629.

Levi, Sylvain

- 1912 “Une légende de Karuṇā-Puṇḍarīka en langue tokharienne”,

Festschrift Wilhelm Thomsen (Leipzig: Harrassowitz): 155-165.

Matsunami, Seiren 松涛誠廉

1965 *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library* (Tokyo: Suzuki Research Foundation)

May, Jacques

1970 “Review: *Karuṇapundarika*”, *T'oung Pao, Second Series* 56-4/5: 324-334.

Mibu, Taishun

1959 “A Comparative List of the Bkaḥ-ḥgyur Division in the Co-ne, Peking, Sde-dge and Snar-thaṅ Editions”, 『大正大学研究紀要—文学部・仏教学部』 44: 1-69.

Mitra, Rājendralāla

1882 *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal* (Calcutta: The Asiatic Society of Bengal)

Nyāyabhūṣaṇa, Kunja Vihāri

1901 *Catalogue of Printed Books and Manuscripts in Sanskrit belonging to the Oriental Library of the Asiatic Society of Bengal* (Calcutta: The Asiatic Society)

Pagel, Ulrich & Gaffney, Sean

1996 *Location List to the Texts in the Microfiche Edition of the 'Sel dkar (London) Manuscript bKa' 'gyur*, *Catalogus Codicum Tibetanorum I* (London: The British Library)

Samten, Jampa

1992 *Phug brag bka' 'gyur bris ma's dkar chag, A Catalogue of the Phug-brag Manuscript Kanjur* (Dharamsala: Library of Tibetan Works & Archives)

Silk, Jonathan Alan

- 1994a *The origins and early history of the Mahāratnakūṭa tradition of Mahāyāna Buddhism with a study of the Ratnarāśīsūtra and related materials*, vol.1, A dissertation submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy in The University of Michigan.
- 1994b *The Heart Sūtra in Tibetan, A Critical Edition of the Two Recensions Contained in the Kanjur*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 34 (Wien: Universität Wien)
- Skorupski, Tadeusz
- 1985 *A Catalogue of the Stog Palace Kanjur*, Bibliographia Philologica Buddhica, Series Maior IV (Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies)
- Takaoka, Hidenobu
- 1981 *A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal*, vol. I (Nagoya: Buddhist Library)
- Terakawa, Shunsho
- 1969 *The Karuṇāpundarika: chapters V and VI*, A dissertation in Oriental Studies, Presented to the Faculty of the Graduate School of the University of Pennsylvania in Partial Fulfillment of the Requirements for the degree of Doctor of Philosophy.
- Waldschmidt, Ernst
- 1971 *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*, Teil 3 (Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GMBH)
- Weiler, Royal W.
- 1956 *The Karuṇāpundarika: chapters I and II*, A dissertation in Oriental Studies, Presented to the Faculty of the Graduate School of

the University of Pennsylvania in Partial Fulfillment of the Requirements for the degree of Doctor of Philosophy.

Weller, Friedrich

1971 “Review: *Karunāpundarika*”, *OLZ* 66: 179–184.

Yamada, Isshi

1968a *Karunāpundarika, edited with Introduction and Notes*, vol.1
(London: School of Oriental and African Studies, University of London)

1968b *ibid.*, vol.2

Yoshizaki, Kazumi

1991 *A Catalogue of the Sanskrit and Newari Manuscripts in the Āśā Archives (Āśā saphu kuthi)*, CWASA PASA, Kathmandu, Nepal
(Kumamoto: Kurokami Library)

Zacchetti, Stefano

2005 *In Praise of the Light: A Critical Synoptic Edition with an Annotated Translation of Chapters 1–3 of Dharmarakṣa’s Guang zan jing 光讚經, Being the Earliest Chinese Translation of the Larger Prajñāpāramitā*, Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica VIII (Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University)